



大学生の宗教観と幸福感に関する心理学的研究

谷, 芳恵

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 1(1):17-24

(Issue Date)

2007-11-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/80060003>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/80060003>



大学生の宗教観と幸福感に関する心理学的研究 - A Psychological Study on View of Religion and Happiness of University Students

谷 芳恵*
Yoshie TANI*

要約: 大学生の宗教観と幸福感(不安, 正の感情, 人生に対する満足感)との関連を検討するため, 4年制大学(非宗教系)の学生に質問紙調査を実施し, 251名(18~24歳, 男性125名, 女性126名)から有効回答を得た。宗教観について因子分析(主因子法, Promax回転)を行った結果, 「宗教肯定感」「宗教否定感」「民俗宗教性」の3因子が抽出された。男女別に宗教観下位因子の偏相関係数を算出したところ, 男女ともに「宗教肯定感」と「民俗宗教性」との間に正の相関が, 女性では「宗教否定感」と「民俗宗教性」の間に負の相関が認められた。宗教観の男女差を検討した結果, 女性はより「宗教肯定感」「民俗宗教性」が, 男性はより「宗教否定感」が高いことが示された。宗教観因子と各幸福感因子との偏相関係数を算出した結果, 男性では「生き方の不安」, 「人格的成長」と正の有意な相関が, 「人生における目的」と正の有意傾向がみられた。女性では「死の不安」, 「正の感情」, 「環境制御力」との間に正の有意な相関及び有意傾向がみられた。大学生の宗教観の構造と幸福感との関連について, 男性と女性との違いを中心に考察を行った。

キーワード: 宗教観, 幸福感, 大学生

1. 問題と目的

宗教は世界のあらゆる時代, 文化において見出さる。これは日本においても同様である。しかし, 日本において, 特定の宗教に属する人は少ない。そのため, 日本人は無宗教であるというのが一般的な日本人の認識であるようである。しかし, 年始の初詣や墓参り, クリスマスなど, 宗教に関わる諸行事への参加をみると, 日本人の生活から宗教を切り離すことは不可能であるようにみえる。宗教は日本人の生活に深く根ざしており, 宗教無くしては生活が成り立たないといえるほどである。仏教, 神道, キリスト教といった宗教・宗派を問わないこの一見無節操にもみえる態度は, 宗派の壁を超えた寛容な態度とも捉えることが出来るだろう。金児(1997)は, 日本人は宗教集団や教義といった「見える宗教」には否定的ではあるが, 脈々と受け継がれる日本人固有の民俗宗教性をもっていると指摘している。特定宗教を積極的に信仰しはしないが, だからといって宗教心や信仰を否定するわけでもない。このような宗教に対する消極的肯定的態度は, 日本人の宗教への態度を代表するものである(金児, 1997)。

しかし, 1980~90年代のオウム真理教事件を皮切りに, 日本各地でさまざまな宗教団体による事件が相次いで引き起こされた。今日, 日本においては, 新興宗教のみならず, 宗教全般に対する信頼は低下していることが考えられる。さらに青年については, この

20年の間, 宗教を大切であると考えてる人は減少の一途をたどっていることが示されている(総理府青少年対策本部, 2004)。その一方で, 近年大学におけるカルト集団の活動が活発化し, 社会に危機感を広げている。このような集団は, サークル活動や自己啓発セミナーを装って大学生に近づき, 洗脳することで気づかぬうちに学生を集団に引き込んでしまうという認識がある。しかし, 多くの大学生が宗教集団に入信してしまう背景には, 大学生自身に宗教に接近するような何らかの要因があることが予想される。そこでまず, 大学生と宗教との関係について考えてみることにする。

青年期は, 人生の中でも, 特に宗教と密接な関係をもった時期であるといわれる(例えば, 今田, 1955)。青年期になると, 知的発達に伴い, それまで受け入れてきた宗教に関する信条や儀礼慣習に疑問をもち始める。そのような懐疑の時期を通じて, 青年は幼少期までの素朴な信仰を失い, 宗教に対する態度を再構成していくのである。また青年期は, 生理的・精神的・社会的な面等において, 著しい変化を経験する時期でもある。それゆえ青年は, アンバランスの状態を基本的特徴とし, 青年は常に不安定で動揺が激しいといわれる。宗教や信仰は, 安定した枠組みを与えることによって青年の不確かさを和らげる機能をもっており, このような不安定さを支えるという点でも青年期に大きな関わりをもつと考えられる。青年は, 人生の意味や目的といった, 科学的合理主義では解決すること

* 神戸大学大学院総合人間科学研究科博士後期課程

(2007年4月1日 受付)
(2007年6月1日 受理)

のできない多くの悩みや問題に直面する。その問題の解決をもとめて、青年は宗教に関心をもったり入信したりすることが明らかにされている(岩村, 1980; 中島・島津, 1960)。このような現象は回心と呼ばれ、日本人の回心年齢は16~18歳であると報告されている(今田, 1934; 中島・島津, 1960など)。青年自身が自ら意識的に宗教に関わりはじめるのは大学に入ってからという場合が多く、青年期は宗教に対する態度を決定する上で重要な時期であるといえる。

以上のように、信仰や宗教的行動は青年に精神的な構えや支えを与えることが明らかにされており、青年は宗教を通して自らやその人生に向き合ってきたと考えられる。特に、宗教は不安を鎮める機能を持つものであるとして、宗教と不安の関係についてはこれまで宗教に関する心理学的研究のテーマとしてとりあげられてきた(石澤, 2003; 河野, 2000; 牛尾, 1972など)。そのほとんどが不安の感じやすさといった個人特性としての不安や、死に対する不安との関連を検討したものであり、人生や人間関係に関する不安などについては検討されていない。しかし、青年にとって人生や人間関係の問題は重要な課題であると考えられ、このような不安との関連についても検討する必要があるだろう。

一方で、人間が宗教に関わるときに感じている感情は、不安や恐怖といった負の感情ばかりではない(石澤, 2003)。最近まで、心理学領域においては、心理的不適応等の問題の原因は不安などの負の要素にあり、負の要素を取り除くことが個人の心に安寧と秩序をもたらす、正の感情状態を生み出すという考えに基づいて研究がなされてきた。しかし、不安などを感じていないからといって、必ずしも幸せであるとは限らないことを我々は経験的に知っている。日本においては、宗教は不安や恐怖といったネガティブなものとの関連が強調されるためにその存在意義が希薄であるといわれているが、欧米においては、宗教は個人の心に安寧と秩序をもたらすという見方から、宗教と充足感等のポジティブな要因との関連に関する研究が盛んに行われている。このように、宗教が青年にとってどのような役割を担っているのかを知るためには、不安といった負の要素だけではなく、正の要素との関連についても検討することが必要であるといえる。

このような正の要素と負の要素双方を含んだ代表的な心理状態として、幸福感をあげることができる。幸福感とは、「比較的永続的な望ましい心理状態、ないしはその総合的で主観的な評価」であり、「人であれば誰しも希求する人間の主観的なよい状態」である(吉森, 1992)。幸福感に関する多くの研究を検討したアーガイル(1994)は、幸福感の構成要素として認知的側面にあたる「人生に対して満足感をもつこと」、感情的側面にあたる「正の感情が高いこと」、「負の感情が低いこと」の3つをあげている。一般に、正の感情を抱くことと負の感情を感じないことは同じことであると考えられることが多く、そのため正の感情と負の感情は同一次元の両極にあるものと捉えられがちである。しかし、幸せや喜びを感じるのと同時に不安を抱くことがあるように、「正の感情」と「負の感情」は互いに独立していることが示唆されている(Bradburn, 1969)。幸福感を多次元的に捉え、宗教観や宗教行動との関連を検討した研究は、日本では金児(1998)や西沢(1998)がある程度である。金児(1998)らは、宗教に対して肯定的な態度を示すほど感情バランスが正の方

向へと導かれる傾向があり、合理主義・科学主義的な立場から宗教に対して否定的態度を示すほど人生の満足度が低められること、宗教は大切であると考えるほどウェルビーイングが高いことを示している。しかしこれらの研究には、仏教的風潮が色濃く残った地域に住む学生を対象としている(金児, 1998)、宗教への態度を1次元的に捉えている(西沢, 1998)といった問題がある。

以上のことから、本研究では、比較的宗教的風潮が薄いと考えられる地域に住む大学生を対象に、どのような宗教観をもつのかを多次元的に検討する。また、アーガイルの指摘の通り、幸福感を「人生に対する満足度」「正の感情」「負の感情」の3つの要因から捉え、宗教観とこれらの幸福感の要因との関連を探索的に検討する。なお、「負の感情」には特に不安をとりあげ、大学生が直面するさまざまな不安との関連を検討する。これにより、現代の大学生と宗教についての基礎的知見を蓄積することを本研究の目的とする。

2. 方法

1. 調査対象者

京阪神圏の4年制大学(非宗教系)の学生を対象に質問紙調査を実施し、326名から回答を得た。このうち、回答に不備のなかった251名(18~24歳、平均年齢20.28歳、SD=1.22)を分析対象とした。男性は125名(平均年齢20.51歳、SD=1.22)、女性は126名(平均年齢20.05歳、SD=1.19)である。調査は、主に集団的に行われた。大学の講義室において、授業の開始前または終了後に、質問紙を配布、回答を求めた。その他、知人を通して質問紙を配布、回収を行った。調査実施期間は2003年11~12月である。

2. 調査内容

1) 宗教態度

吉田・高木・森(1987)による宗教に対する態度の分類を使用した。

- i. 一つの宗教団体に所属し、熱心に信仰している
- ii. 宗教団体に所属しているが、あまり活動していない
- iii. 規制の宗教は信仰していないが、自分自身の信仰をきちんともっている
- iv. 宗教活動はしていないが、宗教・信仰に関心がある
- v. 宗教団体に所属せず、宗教・信仰に関心もない
- vi. 宗教に反対である

の、6つの態度のうち、自分に最もあてはまるものを選択するよう求めるものである。

2) 宗教観

高木・吉田・森(1987)が作成し、張・高木(1989)によって用いられた宗教観尺度40項目のうち、特定宗教を指すと考えられる1項目を除いた39項目を使用した。神、仏、背後霊など、宗教に偏りがあると考えられる言葉については若干の修正を加えた。「心の支えとして宗教を肯定する」「宗教の弊害を指摘する」「神仏の存在や加護を信じる」「宗教を人間の弱さの現われと捉える」「宗教を人との和や愛情と捉える」「超自然的存在を認める」の6つの下位因子からなる。回答形式は、1:「全くそう思わない」~4:「非常にそう思う」の4件法である。

3) 幸福感

a. 不安

水野(1979)の不安項目を使用した。この尺度は「生きる意味」「人

Table 1 宗教観尺度の因子分析（主因子法・Promax回転）の結果

	因子負荷量		
	1	2	3
「宗教肯定感」 $\alpha = .92$			
17 宗教は、人の手に余る悲しみを和らげ、救いとなる	.76	.11	.01
21 宗教活動を通じて、信者同士のつながりができ、楽しさを感じることができる	.76	.07	-.07
9 宗教活動には、活動そのものに一体感があり、充実感を得ることができる	.75	-.02	-.20
33 宗教は、人生観、世界観、価値観の基準を与えてくれる	.71	.02	-.03
25 信仰心は、心の拠り所や生きがいとなる	.71	.01	.03
32 信仰心をもつことによって、生き物に対し、愛情が深くなる	.68	-.07	.00
8 信仰することによって、お互いに助け合う気持ちを養うことができる	.65	-.07	-.02
31 信仰は、精神安定剤の役割をはたす	.63	.28	-.05
13 宗教活動によって、皆で同じ体験を共有し、共感することができる	.62	.00	-.04
39 宗教心とは、自分の愛し、信じるものを敬い、重んじることである	.62	.00	.08
29 信仰によって、自己を内省し、反省することができる	.62	-.13	.07
16 信仰とは、感謝する気持ちを学ぶことである	.61	-.07	.10
20 信仰心をもつことによって、人との交わりに我を出さず、和をもって接することができる	.58	-.09	.04
36 信仰心をもつことによって、自分の考えや主張を確立することができる	.54	-.04	.10
5 信仰心をもつことによって、心が洗われる	.52	-.05	.25
4 信仰とは、明るく楽しい家庭を築き、円満を保つことである	.44	.09	.21
「宗教否定感」 $\alpha = .89$			
10 信仰は、盲目的で、他を顧みない	-.04	.71	-.11
15 宗教は、自信を失った人間の逃げ場となる	-.04	.69	.04
34 宗教活動は、金銭に結びつき、営利に陥りやすい	-.07	.68	.12
18 宗教活動は、生活を束縛する	-.01	.68	.11
14 信仰のために、他に迷惑をかけても気づかなくなる	.11	.66	.03
6 宗教組織は、強制的である	-.02	.66	.06
22 宗教は、偽善的である	-.29	.62	.05
26 宗教は、国の考えに影響し、政治に利用され、争いに発展する	.13	.62	.04
37 宗教によって、思想が偏り、物事を客観的、科学的、論理的に見ることができなくなる	.04	.57	-.09
23 信仰をもつことは、他力本願で、消極的である	-.22	.56	.01
30 信仰は、形式的、一時的になりやすい	-.03	.56	.15
2 宗教には、排他性や他への攻撃性、差別がみられる	.09	.52	-.06
7 信仰心とは、自分以外のものにたよる心である	.02	.46	-.22
38 宗教とは、大いなる自然の力に恐怖した人間の自己防衛手段である	.26	.46	-.09
「民俗宗教性」 $\alpha = .79$			
19 いつも、神や仏に見守られていると思う	-.10	-.14	.82
27 守護霊、守護神に守られていると思う	.00	.09	.78
3 神や仏は存在する	-.05	-.11	.69
11 自分の心の中に神や仏がいると思う	.03	.01	.57
12 理屈抜きで「すごい」と感じられるような、感覚的で神秘的な力を認めている	.23	.05	.43
35 宇宙をコントロールする大きな何かが存在する	.08	.18	.43
24 自然の中には、人間を超えたものが存在する	.19	.15	.33
因子間相関	1	-.17	.45
	2		.38
累積寄与率	22.98	36.21	41.61

間関係「能力と進路」「死」の4因子からなる。本研究では、調査対象者の負担を軽減するため、50項目のうち因子負荷量の小さい項目等26項目を排除し、24項目を使用した。回答形式は1：「全く不安を感じない」～4：「非常に不安を感じる」の4件法である。

b. 正の感情

小川・門地・菊谷・鈴木（2000）の一般感情尺度「肯定的感情」、Bradburn（1969、金児（1997）訳による）の感情尺度「正の感情」から選定した形容詞11項目を、正の感情項目として使用した。Bradburn（1969）の感情尺度は、本来文章によって与えられ、諾否法で回答を求めらるものであるが、本研究では形容詞に直して使用した。これらの感情を普段どのくらい感じているかを1：「全く感じていない」～4：「いつも感じている」の4段階で評定するよう求めた。

c. 人生に対する満足感

西田（2000）の心理的 well-being 尺度を使用した。この尺度は「人格的成長」「人生における目的」「自律性」「環境制御力」「自己受容」「積極的な他者関係」の6因子からなる。本研究では、43項目のうち、他の因子の負荷量が高い項目等17項目を削除し、26項目を使用した。回答形式は、1：「全くあてはまらない」～6：「非常にあてはまる」の6件法である。

3. 結果

1. 大学生の宗教に対する態度

大学生の宗教に対する態度で最も多かったのは、「v. 宗教団体に所属せず、宗教・信仰に関心もない」人であり、172名（68.5%：男性81名、64.8%：女性91名、72.2%）、であった。「i. 一つの宗

Table 2 不安項目の因子分析（主因子法・Promax回転）の結果

	因子負荷量		
	1	2	3
「生き方の不安」 $\alpha = .82$			
10 自分の就職について…(全く不安を感じない～非常に不安を感じる)	.70	-.30	.10
14 社会に出て行くことを…	.62	-.08	.15
3 将来自分はどうなっていくのか、と…	.62	-.03	-.09
16 目標がわからないことを…	.60	.03	-.04
23 力の限界について…	.54	.13	.00
6 自分の能力について…	.53	.21	.01
22 だらだらとした毎日を…	.50	.09	-.06
20 価値基準がないことを…	.49	.13	.06
12 生き方が間違っているのではないかと…	.45	.23	-.07
「人間関係の不安」 $\alpha = .81$			
5 人から無視されるのではないかと…	-.07	.83	-.07
13 人に裏切られるのではないかと…	-.11	.66	.22
9 独りぼっちになることを…	-.01	.61	.08
2 みんなと居ても、自分は本当はひとりなのではないかと…	.13	.60	-.15
17 人から非難されるのではないかと…	.20	.57	.04
「死の不安」 $\alpha = .80$			
7 家族の死について…	-.16	.08	.80
11 家族が病気になるのではないかと…	-.04	.01	.79
19 両親の老後について…	.00	.03	.60
15 自分の死について…	.20	-.09	.59
24 自分が病気になるのではないかと…	.13	.03	.50
因子間相関	1	.49	.24
	2		.25
累積寄与率	25.37	35.88	42.62

教団体に所属し、熱心に信仰している」は4名（1.6%：男性3名，24%：女性1名，0.8%），「ii. 宗教団体に所属しているが、あまり活動していない」は11名（4.4%：男性5名，4%：女性6名，4.8%），「iii. 規制の宗教は信仰していないが、自分自身の信仰をきちんともっている」は15名（6.0%：男性7名，5.6%：女性8名，6.3%），「iv. 宗教活動はしていないが、宗教・信仰に関心がある」は33名（13.1%：男性14名，11.2%：女性19名，15.1%），「vi. 宗教に反対である」は16名（6.4%：男性15名，12.0%：女性1名，0.8%）であった。

2. 各尺度得点の算出

1) 宗教観

大学生の宗教観の構造を確認するため、因子分析（主因子法，Promax 回転）を行った（Table 1）。その結果、固有値の落ち込み、解釈可能性などから、3因子とするのが妥当であると考えられた。因子負荷量が低い、複数の因子に負荷がかかっているといった問題のみられた2項目を削除し、37項目を採択した。第1因子は、「心の支えとして宗教を肯定する」「宗教を人との和や愛情と捉える」因子（16項目）からなり、宗教への肯定的態度と考えられたことから、「宗教肯定感」因子と命名した。第2因子は、「宗教の弊害を指摘する」「宗教を人間の弱さの現われと捉える」因子（14項目）からなり、宗教への否定的態度と考えられたことから、「宗教否定感」因子と命名した。第3因子は、「神仏の存在や加護を信じる」「超自然的存在を認める」因子（7項目）からなり、日本人の宗教態度の根底にある意識であると考えられる。このような日本人固有の宗教性を金児（1997，1998 など）は民俗宗教性と呼んでいることから、これを「民俗的宗教性」因子と命名した。それぞれ項目得点の合計を項目数で割ったものを因子得点とした。

2) 幸福感

a. 不安

項目を大幅に削減し、また質問形式を変更したことから、因子構

Table 3 正の感情の因子分析（主因子法）の結果

	因子負荷量	
	$\alpha = .91$	
1 活気のある	.76	
7 わくわくした	.73	
3 充実した	.73	
10 喜ばしい	.72	
6 やる気に満ちた	.71	
2 楽しい	.71	
4 陽気な	.71	
5 快調な	.70	
8 興味のある	.67	
11 幸福な	.64	
9 得意気な	.50	
寄与率	47.90	

造を確認するために因子分析（主因子法，Promax 回転）を行った（Table 2）。その結果、固有値の落ち込み等から3因子とするのが妥当と考えられた。いずれの因子においても負荷量が低かった項目など5項目を除き、19項目を採択した。第1因子は人間関係に関わる項目に負荷が高いため「人間関係の不安」因子、第2因子は自分や家族の死、病気に関わる項目に負荷が高いため「死の不安」因子、第3因子は自分の能力や生き方に関わる項目に負荷が高いため「生き方の不安」項目とした。それぞれ項目得点を合計して項目数で割ったものを因子得点とした。

b. 正の感情

因子分析（主因子法）を行った結果、固有値の落ち込み等から1因子とするのが妥当と判断された（Table 3）。このため、全項目の得点を合計し項目数で割ったものを「正の感情」得点とした。

c. 人生に対する満足感

項目を大幅に削減したことから、因子構造を確認するために、因子分析（主因子法，Promax 回転）を行った（Table 4）。その結果「自己受容」で因子負荷が不安定であったため、この4項目を除

Table 4 心理的well-being尺度の因子分析（主因子法・Promax回転）の結果

	因子負荷量				
	1	2	3	4	5
「人生における目的」 $\alpha = .88$					
2 * 私は現在、目的なしにさまよっているような気がする	.96	-.08	-.12	-.06	.04
7 * 私の人生にはほとんど目的がなく、進むべき道を見出せない	.86	-.12	.08	-.04	.01
19 私はいつも生きる目標を持ち続けている	.68	.12	.14	.00	-.09
13 自分がどんな人生を送りたいのか、はっきりしている	.65	.13	-.13	.08	.01
25 * 私は、自分が生きていることの意味を見出せない	.61	.08	.04	.17	-.02
「環境制御力」 $\alpha = .80$					
17 状況をよりよくするために、周りに柔軟に対応することができる	-.06	.87	-.06	.06	-.01
23 自分の周りで起こった問題に、柔軟に対応することができる	.06	.77	.06	-.11	.11
11 私は、上手く周囲の環境に適応して、自分を生かすことができる	.03	.69	-.09	.13	-.04
26 私の今の立場は、様々な状況に折り合いをつけながら、自分で作り上げたものである	-.05	.48	.14	.02	-.02
「人格的成長」 $\alpha = .79$					
1 これからも、私はいろいろな面で成長し続けたいと思う	-.06	.00	.74	.09	-.09
18 自分らしさや個性を伸ばすために、新たなことに挑戦することは重要だと思う	-.14	.12	.69	-.06	-.02
24 私は、新しい経験を積み重ねるのが、楽しみである	-.04	.23	.63	-.09	.09
12 * これ以上、自分自身を高めることはできないと思う	.22	-.13	.60	.04	.08
6 * 私には、もう新しい経験や知識は必要ないと思う	.05	-.16	.58	.04	.00
「積極的な他者関係」 $\alpha = .79$					
4 私は、あたたかく信頼できる友人関係を築いている	-.07	.07	-.09	.84	.08
15 * 私はこれまでに、あまり信頼できる人間関係を築いてこなかった	.06	-.01	-.02	.72	.06
9 * 他者との親密な関係を維持するのは、面倒くさいことだと思う	.07	-.10	.19	.56	.04
21 私は他者といると、愛情や親密さを感じる	.04	.20	.06	.52	-.18
「自律性」 $\alpha = .66$					
22 * 自分の行動を決定するとき、社会的にみとめられるかどうかをまず考える	-.18	-.19	.02	.18	.66
5 * 私は何かを決めるとき、世間からどう見られているかとても気になる	.11	.00	-.09	-.01	.61
10 * 重要なことを決めるとき、他の人の判断に頼る	.12	.20	-.04	-.04	.55
16 何かを判断するとき、社会的な評判よりも自分の価値観を優先する	-.01	.11	.14	-.07	.48
因子間相関	1	.46	.45	.54	.34
	2		.38	.40	.09
	3			.35	.17
	4				.14
累積寄与率	28.14	35.68	42.36	47.67	51.88

*は逆転項目

て再度因子分析を行ったところ、西田（2000）における「人格的成長」「人生における目的」「自律性」「環境制御力」「積極的な他者関係」に一致した。このことから、これらの5因子について項目得点の合計を項目数で割ったものを算出し、各因子得点とした。

3. 大学生の宗教観因子の関連と男女差の検定

宗教観因子の関連を検討するために、男女別に各下位因子間の偏相関係数を算出した（Table 5）。その結果、男性では「宗教肯定感」と「民俗宗教性」との間に有意な正の相関がみられた（ $r = .35$, $p < .001$ ）。また女性では、「宗教肯定感」と「民俗宗教性」との間に有意な正の相関（ $r = .40$, $p < .001$ ）が、「宗教否定感」と「民俗宗教性」との間に有意な負の相関（ $r = -.28$, $p < .01$ ）がみられた。このことから、男女ともに、大学生は宗教に対して肯定的な態度をもつほど民俗宗教性が高いといえる。また、女子学生は宗教に対して否定的な態度をもつほど民俗宗教性が低いといえるが、男子学生ではそのような傾向はみられなかった。

続いて各因子得点について、男女差を検討するためにt検定を行った（Table 6）。その結果、「宗教肯定感」、「民俗宗教性」は男性よりも女性のほうが有意に高く（ $t = 3.93$, $p < .001$; $t = 3.14$, $p < .01$ ）、「宗教否定感」は女性よりも男性の方が有意に高かった（ $t = 2.91$, $p < .01$ ）。このことから、宗教に対する肯定的な態度や、よ

Table 5 男女別にみた宗教観下位因子間の関連（他の因子を統制したときの偏相関係数）

	宗教肯定感	宗教否定感	民俗宗教性
宗教肯定感		-.13	.35***
宗教否定感	.06		-.10
民俗宗教性	.40***	-.28**	

*** $p < .001$ ** $p < .01$
右上：男性 左下：女性

Table 6 男女別にみた宗教観の各下位因子得点の平均値・標準偏差と男女差のt検定

	男性		女性		t 値
	M	SD	M	SD	
宗教肯定感	2.24	.56	2.49	.44	3.93***
宗教否定感	2.73	.59	2.53	.49	2.91**
民俗宗教性	2.15	.62	2.39	.57	3.14**

*** $p < .001$ ** $p < .01$

り根底にある民俗宗教性は男性よりも女性の方が高く、宗教に対する否定的な態度は男性でより高いといえる。

4. 宗教観と幸福感の関連の検定

大学生の宗教観と幸福感の関連を検討するために、他の宗教観因子を統制した上で、各宗教観因子と幸福感各因子との偏相関係数を算出した（Table 7）。その結果、男性では、「宗教否定感」「民俗

Table 7 男女別にみた宗教観と幸福感の関連(他の宗教観因子を統制したときの偏相関係数)

	不安			正の感情	人生に対する満足感				
	生き方の不安	人間関係の不安	死の不安		人生における目的	環境制御力	人格的成長	積極的な他者関係	自律性
男性									
宗教肯定感	.24**	.06	-.11	.02	-.06	.04	.08	-.02	-.09
宗教否定感	-.06	-.02	-.12	.07	.03	.00	.19*	-.11	.10
民俗宗教性	-.03	-.01	.00	.05	.16 [†]	.05	.04	.05	.11
女性									
宗教肯定感	.11	.07	.22*	.04	.13	.19*	.12	-.09	-.03
宗教否定感	.14	.13	.18*	.00	-.08	-.01	.03	-.07	.07
民俗宗教性	.02	.14	.16 [†]	.20*	.11	.06	.09	.14	-.05

**p<.01 *p<.05 [†]p<.10

宗教性」を統制したとき、「宗教肯定感」と「生き方の不安」との間に正の有意な相関がみられた ($r=.24$, $p<.01$)。「宗教肯定感」「民俗宗教性」を統制したとき、「宗教否定感」と「人格的成長」との間に正の有意な相関がみられた ($r=.19$, $p<.05$)。「宗教肯定感」「宗教否定感」を統制したとき、「民俗宗教性」と「人生における目的」との間に正の有意傾向がみられた ($r=.16$, $p<.10$)。このことから男性は、宗教に対して肯定的な態度をもつほど将来や生き方に対する不安を感じやすいといえる。また、宗教に対して否定的な態度をもつほど自らの発達や成長の可能性を感じており、神仏の加護や超自然的なものを感じるほど人生の目的や意味を見出している傾向にあるといえる。

また女性では、「宗教否定感」「民俗宗教性」を統制したとき、「宗教肯定感」と「環境制御力」、「死の不安」との間に正の有意な相関がみられた ($r=.19$, $p<.05$; $r=.22$, $p<.05$)。「宗教肯定感」「民俗宗教性」を統制したとき、「宗教否定感」と「死の不安」との間に正の有意な相関がみられた ($r=.18$, $p<.05$)。「宗教肯定感」「宗教否定感」を統制したとき、「民俗宗教性」と「正の感情」との間に正の有意な相関が ($r=.20$, $p<.05$)、「死の不安」との間に正の有意傾向がみられた ($r=.16$, $p<.10$)。このことから女性は、宗教に対して肯定的な態度をもつほど、周囲の環境をコントロールできていると感じており、死に対する不安を感じやすいといえる。宗教に対して否定的な態度をもつほど死に対する不安を感じやすいといえる。また、神仏の加護や超自然的なものを感じるほど正の感情を感じやすく、死に対する不安を感じやすいといえる。

4. 考察

まず、大学生の宗教観の構造について検討する。高木他 (1987) では、宗教観は6つの下位因子が抽出された。これに対して本研究では、「心の支えとして宗教を肯定する」と「宗教を人との輪や愛情と捉える」、「宗教の弊害を指摘する」と「宗教を人間の弱さの現われと捉える」、「神仏の存在や加護を信じる」と「超自然的存在を認める」がそれぞれ1つになり、宗教に対する肯定的態度、否定的態度、民俗宗教性の3因子が抽出された。これらの3因子の関連を検討するため、男女別に偏相関係数を算出した結果、宗教に対する肯定的態度と否定的態度の間に有意な関連は認められなかった。このことから、宗教がもたらす弊害を指摘したり宗教を弱さの現われとすること、宗教を心の支えとして肯定することは必ずしも対立する観念ではないといえる。また、男女とも宗教に対する肯定的態

度と民俗宗教性の間には有意な関連がみとめられ、宗教に対する肯定的態度が高いほど民俗宗教性が高いという結果であった。これは、何かに守られているという加護観念や超自然的なものを感じる心が宗教に対する肯定的な態度に結びついていることを示唆している。宗教に対する否定的な態度と民俗宗教性の関連では、男性と女性で違いがみられた。男性は宗教に対する否定的態度と民俗宗教性の間に有意な関連は認められなかったが、女性は宗教に対する否定的態度が高いほど民俗宗教性が低かった。これは、女性は神秘的・超自然的なものといった非科学的観念が既成宗教の否定的側面に結びついていると考えていることを示唆している。これに対して男性は、争いや対立を引き起こすような排他的な宗教と超自然的な存在とは独立したものとして捉えているようである。

次に、男性と女性の間の宗教観の差を検討した結果、女性は男性よりも宗教に対してより肯定的に捉える態度が強く、宗教は人々の心を結びつけ、心の支えとなるとより考えていた。また、何かに守られているという加護観念や超自然的なものを感じる心も、男性より女性の方が強かった。これに対して宗教に対する否定的な態度は女性よりも男性の方が強く、男性は宗教の排他性や宗教に頼る人々の弱さをより強く意識しているといえる。石澤 (2003) においても女性でより宗教に対する肯定的態度、民俗宗教性が高いという結果が得られており、この結果は、宗教は女性によって支えられているという従来の指摘に一致するものである。このように、宗教に対して女性はより寛容であると考えられるが、このような男女差がみられる理由として、第一に性役割による違いが挙げられる。宗教に傾倒するのは依存的、ともあれば弱い人間と捉えられがちであり、このような態度は女性なら許容されても男性には受け入れられ難いものであるのかもしれない。このような男らしさ・女らしさのイメージに結びつき、宗教に対する態度に差が生じると考えられる。第二に、女性は宗教、霊的存在を受容する準備性が高いことがあげられる。金児 (1997) は、女性は自身が子どもを産むことで生命の永遠のつながりを意識し、霊的存在に対する感性を養うとしている。さらに女性はより両親、特に母親から宗教観を受け継ぎやすいため、超自然的なものに対する寛容さが培われると考えられる。一方で、牛尾 (1972) は女性よりも男性のほうが宗教観は高いという結果を見出している。これは、石澤 (2003) と本研究が一般大学生を対象としているのに対し、牛尾 (1972) では宗教集団に所属している人や修養科生を対象としているためであると考えられる。実際に宗教集団に所属したり関心をもつ人と、宗教に対して無関心な人とは、

宗教観の構造などに違いがあることが考えられ、宗教との関わり方の深さによる違いを検討することが必要である。

続いて、各宗教観と幸福感の関連について、男女別に検討を行った。まず、宗教観と不安の関連を検討した結果、性別や不安の内容によって関連に違いがみられた。女性では、宗教を心の支えと感じたり超自然的なものを感じる心が強いほど自分や家族の死や健康に不安を感じる傾向がみられ、宗教の否定的な側面を意識するほど健康や死に対する不安が大きくなると考えられた。金児（1997）は、向宗教性は死の不安・恐怖に関連しないとしているが、この結果の違いは金児が向宗教性を1次元と捉えたのに対して本研究では2次元と捉えたこと、性別による違いを考慮していないことが理由として挙げられる。死の不安については、一般の信仰をもたない人では宗教性が高いほど死の不安が高いが、信仰者は他の人と比べて死の不安が低いといった結果がみられている（河野，2000；隈部，2003）。これは、入信などの行動を伴うことで死の不安は軽減されるが、宗教に肯定的な意識をもったり超自然的な存在を信じたりするだけで不安が軽減されるわけではないことを示唆している。一方男性では、死の不安との関連はみられず、自分の生き方や将来への不安と宗教に対する肯定的態度の間のみ関連がみられた。この結果は、宗教に関心をもったり入信したりするきっかけに、自分や人生に対する悩みがあるとするとこれまでの結果に一致すると考えられる。世界青年意識調査（総理府青少年対策本部，2004）によると、日本の青年の6割が現在の社会に不満を抱え、就職といった自分の将来に不安を感じていることが示されている。また、5割の青年は自分がわからなくなることがあると答えており、多くの青年が自分やその将来、人生に悩みや不安を抱えている現状がうかがえる。このような社会背景からは、特に男性青年の宗教への求心性が高まっている可能性が考えられる。

幸福感の他の2要素についても宗教観との関連がみとめられ、女性は神仏に守られているという加護観念や超自然的なものを感じる心が強いほど正の感情を感じやすいという結果が得られた。このことから、何か人間を超えた存在に守られ生かされているというオカゲ（金児，1997）の観念は、女性にポジティブな感情をもたらすといえる。男性では同様の結果は認められなかったが、金児（1998）に一致する結果である。また女性は、宗教を、愛情を与え心の支えになるものとして認めているほど、周囲の環境によく適応していると感じていた。宗教は人や環境との調和、協調をもたらすものであり、それが周囲とうまくやっていると感覚につながるということが考えられる。男性は、何かに守られているという意識や超自然的なものを感じる心が強いほど、人生の目的や目標、その意味をはっきりと感じる傾向がみられた。この関連は有意傾向にとどまり、明確な結果は得られなかったが、男性において民俗宗教性は人生や生き方の指針を与えることが考えられる。一方で男性は、宗教を心の弱さの現れと考えたりその排他性、弊害を意識するほど自らの成長、発展性を感じていた。宗教に頼るといふ行為が他力本願であり、そのようなものに頼らず独立して生きているという意識が自分への肯定的な評価につながったと考えられる。これは、男性は宗教を肯定的に捉えるだけでなく、否定的な側面を認識するほど幸福感が高くなることを示唆している。

以上の結果から、大学生の宗教に対する関心が高いほど人生や死

に関する悩み、不安が高いこと、男性では宗教への否定的な認識や超自然的な存在を信じる心が強いほど、また女性では宗教への肯定的な認識や超自然的な存在を信じる心が強いほどポジティブな感情や満足感が高いことが示唆された。また、宗教観と幸福感の関連には男性と女性とで違いがあり、男女で宗教の持つ意義や位置づけが異なることが考えられた。このように、いずれも弱い関連にとどまったが、大学生において宗教観は不安だけではなく、正の感情、人生に対する満足感とも関連することがうかがえた。しかし、宗教に対して肯定的な態度を持つほど幸福感が高いと一概にいうことはできなかった。幸福感に対するポジティブとネガティブ双方の関連がみられた原因として、不安や悩みをもつことが宗教に接近する要因となり、宗教に接近することで人生に対して満足感や正の感情を抱くようになることなどが考えられるが、今回の結果からはこれらの因果的関連を明らかにすることはできない。また本研究では、一般大学生を対象とするために意識レベルでの宗教観と幸福感の関連について検討を行ったが、これまでの研究では宗教を行動レベルで捉えるか意識レベルで捉えるかによって幸福感との関連が異なることが示されており、行動レベルでとらえた場合、これらの関連はより強いものになることが考えられる。以上のことから、今後実際に宗教集団に所属する学生と信仰をもたない学生とを比較し、宗教観と幸福感の因果関係を含めた関係性と、行動レベルでの宗教がもたらす幸福感について検討することが必要である。それによって現代青年において宗教が果たしている役割についてさらに考察を深めることで、現在の宗教と青年を取り巻く問題をより明確に捉えることが可能になるだろう。

<付記>

本論文は、2003年度神戸大学発達科学部卒業研究の一部に加筆・修正を行ったものである。また、本論文の一部は、日本青年心理学会第12回大会（2004年、九州大学）で発表された。本論文の作成にあたり、ご指導賜りました現甲南女子大学の佐藤眞子教授、神戸大学発達科学部の齊藤誠一准教授に深く御礼申し上げます。

5. 引用文献

- アーガイル, M. 石田梅男(訳)(1994). 幸福の心理学 誠信書房 (Argyle, M.(1987). The Psychology of Happiness. London: Methuen)
- Bradburn, N. (1969). The Structure of Psychological Well-being. Chicago: Aldine
- 今田 恵 (1934). 宗教心理学 文川堂書房
- 今田 恵 (1955). 宗教意識の発達 牛島義友(編) 青年心理学講座 I 文化と人生観 金子書房 P.p.101-145.
- 石澤和子 (2003). 大学生における宗教観と不安の関係についての研究 聖マリアンナ医学研究誌, 3, 25-32.
- 岩村暢子 (1980). 新宗教調査をとおしてみた現代青年の問題 和光大学人文学部紀要, 15, 93-102.
- 金児暁嗣 (1997). 日本人の宗教性—オカゲとタタリの社会心理学— 新曜社
- 金児暁嗣 (1998). 宗教と心理的充足感 濱口恵俊(編) 世界のなかの日本型システム 新曜社 P.p.301-329.

- 河野由美 (2000). 大学生の宗教観と死観及び死の不安に関する計量的研究 飯田女子短期大学紀要, **17**, 73-87.
- 隈部知更 (2003). DAP-R 日本語版の内容的妥当性—死への態度と信仰の関係— 心理臨床学研究, **20**, 601-607.
- 水野正憲 (1979). 不安の研究 (1) —大学生の不安の構造— 岡山大学教育学部研究集録, **50**, 137-145.
- 中島 誠・島津 忠 (1960). 現代学生と宗教 哲学研究, **41**, 199-238.
- 西田裕紀子 (2000). 成人女性の多様なライフスタイルと心理的 well-being に関する研究, 教育心理学研究, **48**, 433-443.
- 西沢 悟 (1998). 宗教心理と精神健康—現代大学生について— 北海学園大学学園論集, **96・97**, 1-65.
- 小川時洋・門地里絵・菊谷麻美・鈴木直人 (2000). 一般感情尺度の作成 心理学研究, **71**, 241-246.
- 総理府青少年対策本部 (編) (2004). 世界の青年との比較からみた日本の青年：世界青年意識調査報告書 総理府青少年対策本部
- 高木秀明・吉田富二雄・森美奈子 (1987). 現代大学生の宗教意識 (1) —宗教観尺度の作成— 日本心理学会第 51 回大会発表論文集, 544.
- 張 日昇・高木秀明 (1989). 大学生の宗教態度と宗教観に関する日中比較研究 横浜国立大学教育紀要, **29**, 121-135.
- 牛尾治代 (1972). 宗教的行動とパーソナリティ特性 教育心理学研究, **20**, 41-49.
- 吉田富二雄・高木秀明・森美奈子 (1987). 現代大学生の宗教意識 (2) —宗教観・宗教態度と適応との関連— 日本心理学会第 51 回大会発表論文集, 545.
- 吉森 護 (1992). ハッピーネスに関する心理学的研究 (1) —ハッピーネスに関する心理学的な基本問題— 広島大学教育学部紀要第 1 部 (心理学), **41**, 25-34.